

## 10 系統解剖学の起源としてのヴェサリウス解剖

坂井建雄

解剖学の教科書は、人体の構造をすべて網羅することを原則として書かれている。人体構造を網羅する枠組みとして、現在の解剖学には二つの枠組みがある。人体構造を器官系に分けて記述する系統解剖学と、身体の部位ごとに分けて記述する局所解剖学である。現在の系統解剖学では、おもに器官の機能が考慮されて、器官系を区別している。代表的なものとして藤田恒太郎の『人体解剖学』では、①骨格、②筋、に続いて、内臓として③消化呼吸系、④泌尿生殖系、などを扱い、⑤脈管系(血管系とリンパ系を含む)、⑥神経系(中枢神経系と末梢神経系を含む)、⑦感覚器、で結ぶ。消化器と呼吸器を合わせたところ、および泌尿器と生殖器を合わせたところは、機能だけでなく、個体発生と系統発生に基づく起源が重視され

た結果である。

系統解剖学を標榜する最初の解剖学書を探し求めると、ヤコブ・ヘンレの『人体系統解剖学全書』(全三巻、一八五五〜一八七二)にたどり着く。この解剖学書の構成は、第一巻が運動器として骨と靭帯と筋を扱い、第二巻が内臓として皮膚、消化器、呼吸器、泌尿器、生殖器、血管腺、感覚器を扱い、第三巻の第一部が血管系を、第二部が神経系を扱う。ここには器官系の起源という視点がなく、一八五九年のダーウィンによる進化論以前の身体観が投影されている。

さてここで近代的な解剖学の出発点のヴェサリウスを見ると、歴史的な大著である『ファブリカ』を出版した同じ一五四三年に、『エピトメ』という要約版を出版しているのに気付く。『ファブリカ』の構成については、すでに報告したように、前半四巻の①骨格、②筋、③血管、④神経は、素材別の素朴な系統的編成であり、後半三巻の⑤腹部内臓、⑥胸部内臓、⑦頭部内臓は、局所的編成で、全体としては折衷的な構成をとっている。これに対し『エピトメ』の六章は、①骨格、②筋、③消化器と

静脈、④心臓と動脈、⑤脳と神経系、⑥生殖器、という構成は、当時の身体観を支配したガレノス生理学に基づくものである。『エピトメー』は、『ファブリカ』の内容を単に圧縮したものではなく、ガレノス生理学に基づいて系統別に整理したもの、すなわち当時の身体観に基づく系統解剖学であった。

ヴェサリウスからヘンレまでの間の解剖学書は、おおむね局所解剖学の構成を取るものが多いが、一八世紀には系統解剖学に近い構成を取るものとして、ウィンスローの『解剖示説』のように『ファブリカ』の形式を踏襲したものや、チェセルデンの『人体解剖学』のように『エピトメー』の形式を修正したものなどがある。しかし、いずれも骨と筋から始まるという点では、ヴェサリウスの『ファブリカ』および『エピトメー』と共通している。そして解剖学書を骨と筋から始めるヴェサリウス以来のこの伝統は、そのままヘンレの『人体系統解剖学全書』や、また同じ頃に発行されたグレイの『解剖学、記述と外科』（一八五八年）にも引き継がれている。そして進化論に基づく比較解剖学と発生学を取り入れたゲーゲンバウ

ルの『人体解剖学教科書』も同様に骨と筋から始まっている。

解剖学の観察を骨と筋から始めるということは、ガレノスが『解剖技法』の第二章で推賞しているが、ガレノスの解剖学書とみなせる『解剖技法』と『体部の有用性』も、ともに局所解剖学的な構成を取っており、各部の記述の中を骨と筋から始めているのみである。またイブ・シーナの『医学典範』は、解剖学を含んでいるが、そこでは骨、筋、神経、血管のみを扱っている。また中世のモンディーノ由来の解剖学は、①腹部、②胸部、③頭部、④四肢を扱う局所解剖学的なものであった。

こういった中で、ヴェサリウスの『エピトメー』は、身体観こそ現在と異なっているとはいえ、局所解剖学の文脈を切り捨て、人体の器官を系統別に整理することを志した系統解剖学の最初の試みである。

(順天堂大学医学部解剖学)